
ニューヨーク留学体験記

杉本 敦史 Columbia University

私は、細胞科学研究財団より育成助成をいただき、2022年4月よりアメリカ・ニューヨークにあるコロンビア大学へ研究留学しております。留学前は、消化器外科医として臨床現場に携わりながら、大学院の博士課程を修了しました。今年で留学3年目となったニューヨークより寄稿させて頂いております。

思い返せば留学先を探していた頃はまだCOVID-19の影響で海外渡航が制限されていたこともあり、海外学会へ参加や研究室へ直接訪問することが難しく、留学先とのやりとりはメールやビデオ通話などのオンラインのみでしたので、留学が実現するまでは少し不安な日々を過ごしていました。その後、紆余曲折はありましたが無事に留学が決まり、人生で初めてニューヨークの地へ降り立った時は感動もひとしおだったことが思い出されます。幸い、留学開始後はCOVID-19による生活制限は徐々に解除されていきましたので、研究活動は順調にスタートすることができました。

研究室があるColumbia university Irving Cancer Research Centerはニューヨーク市マンハッタンの北部に位置し、メジャーリーグ・ニューヨークヤンキースの本拠地であるヤンキースタジアムなどが近くにあります。私は毎日、自宅アパートから大学のシャトルバスを利用して通勤しています。アパートからは歩いてセントラルパークに行くことができ、マンハッタンは地下鉄やバスが充実しているため、ダウンタウンへのアクセスも非常に便利です。一方でニューヨークの物価の上昇は著しく、特にアパートの家賃は高騰しており、大学からの給料だけでは経済的にかなり厳しいのが現実です。生活面は助成金に本当に助けていただきました。

私が所属しているSchwabe教授の研究室は、ポスドク、大学院生、テクニシャンを合わせても8名程度の比較的小さい研究室です。肝疾患や肝癌をテーマとした研究を行っており、メンバーそれぞれに個別のプロジェクトを進めながら、お互いの実験やデータ解析についても積極的に議論し、協力し合っています。週に1度の全体と個別のミーティングがあり、研究の進捗報告や論文抄読会を行っています。さらに、学内や国外の様々な研究室と共同研究が盛んに行われているため、ビデオ通話を利用したミーティングが度々行われます。留学開始当初はミーティングでの英語についていくのが大変でしたが、最近は徐々に慣れてきたことで何とか乗り

切っています。世界各地の研究室が得意な専門分野で協力し合って、一つの仮説を検証していく研究は非常にダイナミックでとても勉強になります。

最後になりますが、この度は留学の機会を支援して下さいました細胞科学研究財団の関係者の皆様に深く感謝を申し上げます。また、留学を実現するまでにお世話になりました大阪公立大学（旧大阪市立大学）の消化器外科、肝胆膵外科および癌分子病態制御学の先生、特に大平雅一先生、久保正二先生、そして八代正和先生にこの場をお借りして感謝を申し上げます。帰国後は医師として、日本の医療と生命科学の発展、そして何より目の前の患者さんへ貢献できるように引き続き努力して参ります。



研究室から望むマンハッタンの夕暮れ